

小学生における支援ニーズが学級適応およびコンピテンス に及ぼす影響

—学級担任による支援ニーズ認知得点にもとづく検討—

安立 奈歩*・西出 弓枝*

Effects of Special Needs on Classroom Adjustment and Competence
of Elementary School Children
—Based on Elementary School Teachers' Ratings of Children's Special Needs—

Naho ADACHI and Yumie NISHIDE

キーワード：学級経営，児童の支援ニーズ，アクションリサーチ

I. 問題・目的

特別支援教育における取り組みが展開する過程において，支援ニーズのある児童生徒への支援を実施する際，地域の小中学校との連携の必要性や意義が指摘されてきた（文部科学省，2004；国立特殊教育総合研究所，2008；西出・布本，2006，西出，2008）。

本研究は，その取り組みの一環である。小学校において学級ごとに，児童を対象に学級適応・学習や社会性におけるコンピテンスの自己評価を行い，同時に学級担任に対して，各児童についてどの程度どのような支援ニーズがあると感じているのかについての評価を，1学期に行った。その上で，夏休みに，心理専門家である筆者2名が小学校を訪問して学級経営支援研修会を実施し，各担任への結果のフィードバックと相談を行った。その後，2学期末にも同様の調査を実施し，1学期の結果との比較をすることで，学級経営支援研修会を行ったことの効果の検証を試みた。

II. 方法

1. 研究協力者

A小学校の児童375名（1年生72名，2年生78名，3年生56名，4年生75名，5年生50名，6年生44名），特別支援学級担任を除く担任教諭13名。

* 人間関係学部 心理学科

2. 調査概要および手続き

2-1. 児童を対象とした調査

X年6月中旬（以下、1学期と表記する）および11月下旬（以下、2学期と表記する）に児童に対し、以下の調査を行った。

- ① 学級適応を測定する尺度：河村が開発した Questionnaire-Utilities（以下、Q-U）。友達関係3項目、学習意欲3項目、学級の雰囲気3項目、承認6項目、被侵害6項目、計24項目から成る。いずれも「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」（低学年はひらがな表記）の4件法にて回答を求めた。
- ② コンピテンスを測定する尺度：認知されたコンピテンス測定尺度（桜井，1983）から抜粋し、「学習コンピテンス」「友達コンピテンス」「運動コンピテンス」「生き方コンピテンス」の4因子を想定し、回答形式や表現を一部修正した12項目と、Kiss-18（菊池，2007）から抜粋し、「コミュニケーションコンピテンス」「問題解決コンピテンス」の2因子を想定して、児童用に表現を修正した6項目の、計18項目から成る。項目の低学年用にはひらがな表記とし、高学年の項目には、漢字にふりがなをふるなど児童の理解度にあわせて表記を変更した。項目内容は低学年版と高学年版で一致している（表1-1, 1-2）。本研究では、この18項目を“SOCIAL SKILL & COMPETENCE SCALE”と命名して実施した（以下、SC-S 尺度と表記する）。いずれも「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」（低学年はひらがな表記とした）の4件法にて回答を求めた。

表1-1 SC-S 尺度の下位項目（低学年版）

学習コンピテンス	1. べんきょうはとてもよくできるとおもいます。 5. べんきょうをやりおえるのにかなりじかんがかかります。（*） 9. まなんだことはよくわすれます。（*）
友達コンピテンス	2. ともだちからはすかれやすいとおもいます。 6. いつもたくさんのともだちとすごします。 10. ともだちのなかではにきがあるとおもいます。
運動コンピテンス	3. うんどうはすきでよくできるとおもいます。 7. ともだちよりうんどうはよくできるとおもいます。 11. あたらしいうんどうはうまくできません。（*）
生き方コンピテンス	4. いまのいきかたでよいとおもいます。 8. いまのままのじぶんにとてもまんぞくしています。 12. じぶんにはなおしたいところがたくさんあります。（*）
コミュニケーションコンピテンス	14. まわりのひととすぐにはなしができます。 15. しらないひとにでもはなしかけることができます。 16. ともだちがはなししているところにきがるにはいっていきます。
問題解決コンピテンス	13. ひとがこまっているときにたすけてあげます。 17. なにかしっぱいをしたときにすぐにあやまります。 18. まわりのひとたちがじぶんとちがっていてもきょうりよくしてすすめます。

（*）は逆転項目

表1-2 SC-S 尺度の下位項目（高学年版）

学習コンピテンス	1. 勉強は、よくできると思います。 5. 勉強をやり終えるのにかなり時間がかかります。（*） 9. 学んだことはよく忘れます。（*）
友達コンピテンス	2. 友だちからは好かれやすいと思います。 6. いつもたくさん友だちと過ごします。 10. 友だちのなかでは、人気があると思います。
運動コンピテンス	3. 運動は好きで、よくできると思います。 7. 友だちより、運動はよくできると思います。 11. 新しい運動は、うまくできません。（*）
生き方コンピテンス	4. 今の生き方でよいと思います。 8. 今のままの自分にとっても満足しています。 12. 自分には直したいところがたくさんあります。（*）
コミュニケーションコンピテンス	14. 周りの人とすぐに話ができます。 15. 新しい友だちにも、すぐに話しかけることができます。 16. 友だちが話しているところに、気軽に入っていきます。
問題解決コンピテンス	13. 人が困っている時に、助けてあげます。 17. 何か失敗をした時に、すぐに謝ります。 18. 周りの人たちが自分と違っていても、協力して進めます。

（*）は逆転項目

2-2. 学級担任を対象とした支援ニーズ認知に関する調査

同6月、学級担任による児童の支援ニーズ認知を測定するために、学級担任を対象に、学級児童全員について「どの程度ニーズがあるのか（課題があり、教育上の配慮を要すると考えられるか）」を、以下の①～⑥の6項目で、「とてもある」「少しある」「あまりない」「ない」の4件法で回答を求めた。項目内容は、「①学習上の課題」「②社会性の課題（意思疎通の困難・他人の気持ちがわからない）」「③行動上の課題（多動である・衝動的である・不注意）」「④対人関係上の課題（過度に緊張する・黙り込む・大人しい）」「⑤家庭環境上の課題（不適切な養育・家庭の生活リズムの乱れ）」「⑥身体・健康上の課題（頭痛・腹痛・チック・抜毛などの身体症状）」である。さらに、各児童について「特に気になる状況」があれば、自由記述形式で記述を求めた。

なお①～⑥について、以下、「学習ニーズ」「社会性ニーズ」「行動ニーズ」「対人関係ニーズ」「家庭ニーズ」「身体ニーズ」と表記する。

2-3. 夏休み期間における小学校教諭に対する学級経営支援研修

6月の調査結果について、児童を対象としたQ-Uの結果と、学級担任が評定した支援ニーズの結果を児童別に結合させ、「学級別データシート」を作成した。この「学級別データシート」は、学級担任によって支援ニーズが高いと評定された児童と、適応感が低いと自己評価した児童が視覚化しやすいよう色づけの工夫をしたものである。

8月下旬、2学期以降の児童支援の方向性を検討する目的で、各学級担任に、Q-Uのシートと同時に、「学級別データシート」を渡し、学級担任に個別に概要をフィードバックした。質問、相談があれば応じた。

3. 調査時期

X年6月および11月

4. 倫理的配慮

調査概要と個人情報保護および研究の公表についてA小学校を管轄する市町村の教育委員会に説明し、同意を得た。A小学校にも同様の説明と同意を得、目的・内容・結果についてはいつでも問い合わせ可能であることを説明し、同意書に署名を求めたうえで調査を実施した¹⁾。

III. 結果

1. 学級担任による児童の支援ニーズ認知

学級担任からみた児童の支援ニーズ認知について、支援ニーズ認知得点6項目それぞれの平均値とSDは表2の通りであった。6項目について、 α 係数を算出したところ $\alpha=.77$ であり、内部整合性が認められたため、6項目の支援ニーズ認知得点合計の平均値(表2)を支援ニーズ認知得点とした。

表2 担任からみた支援ニーズ認知得点の平均値と標準偏差

下位尺度	度数	平均値	SD
学習ニーズ	368	2.16	.98
社会性ニーズ	369	1.98	.91
行動ニーズ	369	2.01	1.03
対人関係ニーズ	369	1.80	.85
家庭ニーズ	368	1.56	.71
身体ニーズ	367	1.35	.65
支援ニーズ合計	369	10.84	3.54

2. 支援ニーズ認知得点とQ-UおよびSC-Sとの関連

支援ニーズ認知得点と児童の学級適応およびコンピテンスに関する各尺度得点との関連を検討するため、以下の手順で分析を行った。まず、低学年、高学年毎に、Q-Uの下位尺度別の平均点を算出した(表3-1, 3-2)。

次に、SC-S尺度の信頼性について、低学年、高学年毎に、学期別に α 係数を算出したところ、表3-3, 3-4の通り、 $\alpha=.52\sim.78$ の範囲であった。やや値の低いものもあるが、全ての下位尺度についてはほぼ十分な信頼性があると判断されたため、SC-S尺度の下位尺度得点を低学年、高学年毎に算出した(表3-3, 3-4)。

以上の結果をもとにして、支援ニーズ認知得点と、Q-UおよびSC-S尺度について、低学年(表4-1, 4-2)、高学年(表4-3, 4-4)別に、ピアソンの積率相関係数を算出した。

低学年においては、支援ニーズ認知とQ-Uの相関分析の結果、1学期の友達関係($r=-.16, p<.05$)との間に低い負の相関が見られた。支援ニーズ認知とSC-Sの相関分析の結果、2学期の学習コンピテンス($r=-.24, p<.01$)、2学期の生き方コンピテンス($r=-.16,$

小学生における支援ニーズが学級適応およびコンピテンスに及ぼす影響

表3-1 低学年における Q-U の下位尺度の平均値と SD

		平均値	SD
1 学期	友達関係	3.28	(.65)
	学習意欲	3.47	(.50)
	学級の雰囲気	3.53	(.58)
	承認	2.95	(.67)
	被侵害	2.03	(.80)
2 学期	友達関係	3.36	(.63)
	学習意欲	3.43	(.50)
	学級の雰囲気	3.55	(.53)
	承認	3.06	(.65)
	被侵害	2.04	(.77)

表3-2 高学年における Q-U の下位尺度の平均値と SD

		平均値	SD
1 学期	友達関係	3.31	(.58)
	学習意欲	3.41	(.50)
	学級の雰囲気	3.36	(.62)
	承認	3.10	(.63)
	被侵害	1.72	(.68)
2 学期	友達関係	3.36	(.54)
	学習意欲	3.31	(.55)
	学級の雰囲気	3.32	(.58)
	承認	3.12	(.63)
	被侵害	1.75	(.65)

表3-3 低学年における SC-S の下位尺度の平均値, SD および α 係数

		平均値	SD	α 係数
1 学期	学習コンピテンス	2.86	(.77)	.59
	友達コンピテンス	2.75	(.78)	.57
	運動コンピテンス	2.61	(.85)	.58
	生き方コンピテンス	2.84	(.78)	.61
	コミュニケーションコンピテンス	2.74	(.85)	.58
	問題解決コンピテンス	3.32	(.72)	.67
2 学期	学習コンピテンス	2.82	(.75)	.61
	友達コンピテンス	2.89	(.80)	.66
	運動コンピテンス	2.74	(.56)	.55
	生き方コンピテンス	2.69	(.76)	.63
	コミュニケーションコンピテンス	2.89	(.82)	.61
	問題解決コンピテンス	3.26	(.66)	.59

表3-4 高学年における SC-S の下位尺度の平均値, SD および α 係数

		平均値	SD	α 係数
1 学期	学習コンピテンス	2.66	(.66)	.52
	友達コンピテンス	2.55	(.72)	.77
	運動コンピテンス	2.40	(.78)	.64
	生き方コンピテンス	2.60	(.69)	.70
	コミュニケーションコンピテンス	2.85	(.78)	.71
	問題解決コンピテンス	3.14	(.65)	.72
2 学期	学習コンピテンス	2.64	(.69)	.74
	友達コンピテンス	2.71	(.70)	.78
	運動コンピテンス	2.66	(.48)	.67
	生き方コンピテンス	2.57	(.66)	.66
	コミュニケーションコンピテンス	2.90	(.80)	.72
	問題解決コンピテンス	3.16	(.62)	.67

表4-1 支援ニーズ認知と Q-U の相関分析 (低学年)

期別		ニーズ	1 学期					2 学期				
			友達	学習意欲	学級の雰囲気	承認	被侵害	友達	学習意欲	学級の雰囲気	承認	被侵害
担任からみた支援ニーズ		—	-.16*	.02	.13	.07	.03	-.07	-.04	.13	.04	-.01
Q-U	1 学期	友達関係	—	.32**	.48**	.67**	-.38**	.58**	.13	.27**	.45**	-.30**
		学習意欲	—	—	.43**	.40**	-.18*	.20*	.45**	.17*	.20**	-.11
		学級の雰囲気	—	—	—	.65**	-.53**	.46**	.20**	.43**	.48**	-.37**
		承認	—	—	—	—	-.45**	.55**	.26**	.42**	.59**	-.35**
	2 学期	被侵害	—	—	—	—	—	-.34**	-.09	-.29**	-.32**	.48**
		友達関係	—	—	—	—	—	—	.31**	.60**	.75**	-.46**
2 学期	学習意欲	—	—	—	—	—	—	—	.30**	.44**	-.13	
	学級の雰囲気	—	—	—	—	—	—	—	—	.62**	-.42**	
	承認	—	—	—	—	—	—	—	—	—	-.43**	
	被侵害	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

*p<.05, **p<.01

表4-2 支援ニーズ認知と SC-S の相関分析 (低学年)

期別		ニーズ	1 学期					2 学期						
			学習 C	友達 C	運動 C	生き方 C	コミュ C	問題解決 C	学習 C	友達 C	運動 C	生き方 C	コミュ C	問題解決 C
担任からみた支援ニーズ		—	-.05	.09	.09	-.01	.01	-.03	-.24**	-.03	-.07	-.16*	-.09	-.27**
SC-S	1 学期	学習コンピテンス	—	.18**	.24**	.40**	.12	.19**	.50**	.15*	.12	.17*	.06	.18*
		友達コンピテンス	—	—	.21**	.34**	.38**	.24**	.11	.40**	.11	.20**	.17*	.28**
		運動コンピテンス	—	—	—	.28**	.18*	.09	.27**	.29**	.30**	.09	.20**	.14
		生き方コンピテンス	—	—	—	—	.34**	.34**	.39**	.38**	.17*	.50**	.18*	.32**
		コミュニケーションコンピテンス	—	—	—	—	—	.38**	.28**	.30**	.19**	.20**	.48**	.33**
	2 学期	問題解決コンピテンス	—	—	—	—	—	—	.15*	.35**	.12	.27**	.25**	.53**
		学習コンピテンス	—	—	—	—	—	—	—	.34**	.29**	.41**	.21**	.36**
		友達コンピテンス	—	—	—	—	—	—	—	—	.20**	.42**	.36**	.49**
		運動コンピテンス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	.23**	.32**	.29**
		生き方コンピテンス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	.19**	.38**
コミュニケーションコンピテンス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	.36**		
問題解決コンピテンス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

*p<.05, **p<.01

p<.05) との間に弱い負の相関が認められた。

低学年においては、学級担任からみた支援ニーズ認知は学級適応・コンピテンスとの関連が限定的であり、2 学期に一部関連が認められる程度であった。

一方、高学年においては、支援ニーズ認知と Q-U の相関分析の結果、1 学期の友達関係 ($r=-.22, p<.01$), 学習意欲 ($r=-.26, p<.01$), 承認 ($r=-.21, p<.05$), 被侵害 ($r=.16, p<.05$) との間に弱い相関が認められた。支援ニーズ認知とコンピテンスの相関分析の結果、1 学期においては、学習コンピテンス ($r=-.34, p<.05$), 友達コンピテンス ($r=-.18, p<.05$), 生き方コンピテンス ($r=-.16, p<.05$), 問題解決コンピテンス ($r=-.23, p<.01$) において弱い相関が認められ、2 学期においては、学習コンピテンス ($r=-.28, p<.05$), 友だちコンピテンス ($r=-.21, p<.01$), 問題解決コンピテンス ($r=-.24, p<.01$) において弱い相関が認められた。

高学年においては、学級担任による支援ニーズ認知は、1 学期の学級適応と 1, 2 学期のコンピテンスに関連するものの、2 学期末の学級適応には関連がないことが示唆された。

小学生における支援ニーズが学級適応およびコンピテンスに及ぼす影響

表4-3 支援ニーズ認知と Q-U の相関分析 (高学年)

期別			1 学期					2 学期					
			ニーズ	友達	学習意欲	学級の雰囲気	承認	被侵害	友達	学習意欲	学級の雰囲気	承認	被侵害
担任からみた支援ニーズ			—	-.22**	-.26**	-.05	-.21**	.16*	-.01	.01	.04	.00	-.03
Q-U	1 学期	友達関係	—	.52**	.58**	.79**	-.47**	.33**	.17*	.22**	.24**	-.21**	
		学習意欲	—	.33**	.57**	-.22**	.31**	.22**	.15	.21**	-.15		
		学級の雰囲気	—	.67**	-.28**	.258**	.20*	.25**	.17*	-.12			
	2 学期	承認	—	—	-.49**	.34**	.18*	.27**	.309**	-.21**			
		被侵害	—	—	—	-.26**	-.15	-.13	-.24**	.26**			
		友達関係	—	—	.51**	.59**	.74**	-.53**					
2 学期	学習意欲	—	—	.36*	.54**	-.32**							
	学級の雰囲気	—	—	.67**	-.29**								
	承認	—	—	—	-.46**								
被侵害			—	—	—	—	—	—	—	—	—		

*p<.05, **p<.01

表4-4 支援ニーズ認知と SC-S の相関分析 (高学年)

期別			1 学期						2 学期						
			ニーズ	学習C	友達C	運動C	生き方C	コミュC	問題解決C	学習C	友達C	運動C	生き方C	コミュC	問題解決C
担任からみた支援ニーズ			—	-.34**	-.18*	-.07	-.16*	-.05	-.23**	-.28**	-.21**	-.13	-.06	.05	-.24**
SC-S	1 学期	学習コンピテンス	—	.26**	.27**	.32**	.17*	.27**	.68**	.24**	.28**	.22**	.14	.21**	
		友達コンピテンス	—	.57**	.37**	.56**	.52**	.23**	.72**	.24**	.32**	.45**	.41**		
		運動コンピテンス	—	.19*	.47**	.38**	.27**	.42**	.30*	.07	.38**	.14			
	2 学期	生き方コンピテンス	—	—	.21**	.36**	.28**	.39**	.24**	.56**	.06	.37**			
		コミュニケーションコンピテンス	—	—	—	.54**	.18*	.47**	.29**	.07	.64**	.40**			
		問題解決コンピテンス	—	—	—	.19*	.40**	.17*	.24**	.42**	.58**				
2 学期	学習コンピテンス	—	—	.25**	.39**	.30**	.13	.12							
	友達コンピテンス	—	—	.38**	.46**	.52**	.47**								
	運動コンピテンス	—	—	.26**	.18*	.16*									
2 学期	生き方コンピテンス	—	—	—	.14	.34**									
	コミュニケーションコンピテンス	—	—	—	—	.49**									
問題解決コンピテンス			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			

*p<.05, **p<.01

2. 評価時期と学級担任による支援ニーズ認知が児童の学級適応に及ぼす影響

2-1. 支援ニーズ認知得点を基準にした児童の群分け

学級担任によって評定された支援ニーズ認知得点によって、児童の学級適応およびコンピテンスに相違があるかを検討するために、以下の手順で検討した。

まず、全校児童を対象として、6項目の支援ニーズ認知得点(理論的範囲：4-24)の分布を調べ、低学年、高学年毎に、図1-1、1-2に示した。また、全校児童における支援ニ

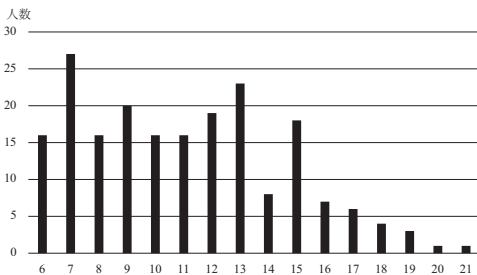


図1-1 支援ニーズ認知得点の分布 (低学年：N=201)

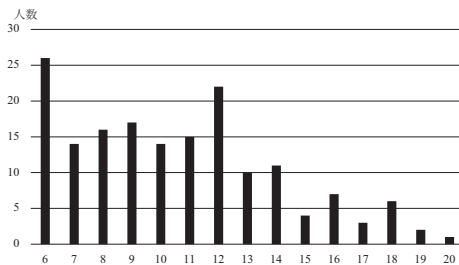


図1-2 支援ニーズ認知得点の分布 (高学年：N=168)

ズ認知得点の4分位を算出したところ、25%は8点、50%（中央値）は11点、75%は13点であった。

以上の検討を踏まえて、支援ニーズ認知得点が生児の25%未満を「支援ニーズ低群」、25～75%を「支援ニーズ中群」、75%以上を「支援ニーズ高群」と命名した。すなわち、支援ニーズ低群とは、学級担任からみて支援の必要性が低いと判断される児、支援ニーズ高群とは支援の必要性が高いと判断される児、支援ニーズ中群とはその中間と捉えることができる²⁾。

2-2. 支援ニーズ認知得点を基準にした分類別にみる児の学級適応

上述の分類に基づいて、低学年（表5-1、5-2）、高学年（表5-3、5-4）毎に、Q-UおよびSC-S尺度の得点を算出した。そして、Q-Uの5つの下位尺度、コンピテンスの6つの下位尺度を従属変数として、学期（2：被験者内）×群（3：被験者間）の2要因分散分析を行った。

その結果、低学年では、次のように、いくつかの主効果と1つの交互作用が見られた。

まず主効果については、Q-Uで、友達関係 [F(1,197)=4.56, p<.05], 承認 [F(1,196)=7.18, p<.01] において、1学期より2学期の得点が有意に高かった。また、SC-Sでは、学期の主効果として、友達コンピテンスにおいて、1学期より2学期の得点が有意に高かった [F(1,196)=4.53, p<.05]。逆に生き方コンピテンスにおいては、1学期より2学期の得点が有意に低かった [F(1,195)=10.30, p<.01]。群別の主効果も認められ、多重比較の結果、問題解決コンピテンスにおいて、支援ニーズ低群が高群より得点が有意に高かった [F(2,195)=4.56, p<.01]

さらに低学年では、SC-Sのうち、問題解決コンピテンスについてのみ交互作用が認められ、支援ニーズ高群において、1学期よりも2学期の得点が有意に低かった [F(2,195)=5.45, p<.01]。

高学年では、次のように、いくつかの主効果と交互作用が認められた。

まず主効果については、Q-Uでの主効果は見られなかった。SC-Sでは、学期の主効果として、友達コンピテンス [F(1,154)=6.53, p<.05], 運動コンピテンス [F(1,157)=12.56, p<.01] において、1学期より2学期の得点が有意に高かった。群別の主効果も認められ、多重比較の結果、学習コンピテンス [F(2,159)=7.47, p<.01], 友達コンピテンス [F(2,154)=3.22, p<.05], 問題解決コンピテンス [F(2,158)=5.47, p<.01], において、いずれも支援ニーズ低群が高群より得点が有意に高かった。

次に、交互作用については、Q-Uにおいて、友達関係 [F(2,159)=4.58, p<.05], 承認 [F(2,159)=3.07, p<.05], 被侵害 [F(2,158)=4.74, p<.05] の3つで有意な交互作用が認められた。友達関係と承認では1学期においては支援ニーズ低群が高群より有意に得点が高かったが、2学期においては有意差が認められなかった。被侵害では1学期に支援ニーズ低群が高群より有意に得点が低かったが、2学期には有意差が認められなかった。

高学年のコンピテンスに関しては交互作用が認められず、学期・支援ニーズの主効果が認められたにとどまった。

小学生における支援ニーズが学級適応およびコンピテンスに及ぼす影響

表5-1 支援ニーズ認知得点に基づく群別にみた Q-U の平均値と SD (低学年)

() 内は SD

	支援ニーズ低群 N=59		支援ニーズ中群 N=106		支援ニーズ高群 N=36		主効果
	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期	
友達関係	3.33 (.64) N=59	3.41 (.58) N=58	3.32 (.62) N=106	3.36 (.65) N=107	3.28 (.65) N=36	3.36 (.63) N=36	1 学期 < 2 学期 (p<.05)
学習意欲	3.44 (.57) N=59	3.50 (.49) N=59	3.50 (.42) N=106	3.38 (.49) N=107	3.47 (.50) N=36	3.43 (.50) N=36	
学級の雰囲気	3.41 (.74) N=59	3.46 (.61) N=59	3.58 (.46) N=106	3.57 (.50) N=107	3.53 (.58) N=36	3.55 (.53) N=36	
承認	2.87 (.76) N=59	3.06 (.70) N=59	3.00 (.63) N=106	3.05 (.61) N=105	2.95 (.67) N=36	3.06 (.65) N=36	1 学期 < 2 学期 (p<.01)
被侵害	2.07 (.86) N=59	2.05 (.83) N=59	1.97 (.80) N=106	2.05 (.73) N=104	2.03 (.80) N=36	2.04 (.77) N=36	

表5-2 支援ニーズ認知得点に基づく群別にみた SC-S の平均値と SD (低学年)

() 内は SD

	支援ニーズ低群 N=59		支援ニーズ中群 N=106		支援ニーズ高群 N=36		主効果 (群の主効果は多重比較)	交互作用
	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期		
	学習コンピテンス	2.95 (.73) N=59	3.09 (.72) N=59	2.83 (.77) N=106	2.71 (.70) N=107	2.80 (.83) N=36		
友達コンピテンス	2.69 (.79) N=59	3.02 (.81) N=58	2.78 (.78) N=106	2.84 (.76) N=106	2.76 (.78) N=36	2.80 (.87) N=36	1 学期 < 2 学期 (p<.05)	
運動コンピテンス	2.61 (.88) N=59	2.80 (.56) N=59	2.56 (.85) N=106	2.74 (.52) N=107	2.77 (.78) N=36	2.67 (.67) N=36		
生き方コンピテンス	2.95 (.74) N=59	2.82 (.78) N=59	2.77 (.79) N=104	2.67 (.69) N=107	2.87 (.83) N=35	2.52 (.89) N=36	1 学期 > 2 学期 (p<.01)	
コミュニケーションコンピテンス	2.70 (.87) N=59	2.82 (.90) N=58	2.79 (.79) N=106	3.02 (.72) N=105	2.67 (1.00) N=36	2.59 (.88) N=36		
問題解決コンピテンス	3.30 (.84) N=58	3.46 (.63) N=59	3.39 (.55) N=105	3.29 (.55) N=106	3.17 (.90) N=36	2.87 (.83) N=36	高群 < 低群 (p<.01)	高群 : 1 学期 > 2 学期 (p<.01)

表5-3 支援ニーズ認知得点に基づく群別にみた Q-U の平均値と SD (高学年)

() 内は SD

	支援ニーズ低群 N=55		支援ニーズ中群 N=80		支援ニーズ高群 N=33		主効果	交互作用
	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期		
友達関係	3.43 (.40) N=54	3.27 (.60) N=55	3.30 (.60) N=80	3.44 (.50) N=76	3.10 (.74) N=33	3.31 (.52) N=32		1 学期：高群<低群 (p<.05)
学習意欲	3.50 (.48) N=54	3.30 (.66) N=55	3.47 (.41) N=80	3.33 (.47) N=76	3.13 (.62) N=33	3.27 (.55) N=32		
学級の雰囲気	3.39 (.56) N=54	3.25 (.64) N=55	3.38 (.63) N=80	3.35 (.56) N=75	3.27 (.68) N=33	3.39 (.53) N=32		
承認	3.25 (.43) N=54	3.09 (.58) N=55	3.09 (.66) N=80	3.13 (.63) N=76	2.89 (.78) N=33	3.13 (.71) N=32		1 学期：高群<低群 (p<.05)
被侵害	1.51 (.58) N=54	1.78 (.62) N=55	1.78 (.65) N=80	1.74 (.69) N=75	1.91 (.83) N=33	1.68 (.63) N=32		1 学期：高群>低群 (p<.05)

表5-4 支援ニーズ認知得点に基づく群別にみた SC-S の平均値と SD (高学年)

() 内は SD

	支援ニーズ低群 N=55		支援ニーズ中群 N=80		支援ニーズ高群 N=33		主効果 (群の主効果は多重比較)
	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期	
学習コンピテンス	2.94 (.55) N=54	2.80 (.58) N=54	2.62 (.65) N=79	2.65 (.58) N=80	2.33 (.70) N=33	2.33 (.83) N=30	高群<低群 (p<.01)
友達コンピテンス	2.69 (.62) N=53	2.82 (.67) N=53	2.53 (.71) N=77	2.76 (.69) N=79	2.35 (.84) N=33	2.39 (.74) N=30	1 学期<2 学期 (p<.05) 高群<低群 (p<.05)
運動コンピテンス	2.51 (.73) N=54	2.70 (.40) N=54	2.35 (.80) N=78	2.69 (.51) N=78	2.31 (.78) N=33	2.53 (.53) N=30	1 学期<2 学期 (p<.01)
生き方コンピテンス	2.74 (.57) N=53	2.57 (.71) N=53	2.54 (.77) N=76	2.58 (.51) N=80	2.48 (.64) N=33	2.51 (.66) N=30	
コミュニケーションコンピテンス	2.86 (.65) N=54	2.82 (.77) N=54	2.93 (.73) N=78	2.97 (.76) N=77	2.65 (1.03) N=33	2.87 (.93) N=30	
問題解決コンピテンス	3.26 (.49) N=54	3.36 (.53) N=54	3.18 (.64) N=78	3.12 (.60) N=80	2.84 (.80) N=33	2.94 (.74) N=30	高群<低群 (p<.01)

IV. 考察

本研究では、学級担任による児童の支援ニーズの認知および、児童の学級適応感やコンピテンスを測定し、学級経営支援研修会においてデータをフィードバックして学級担任と児童の状態について具体的に検討することにより、1 学期と 2 学期で、児童の学級適応感およびコンピテンスに変化が生じるのかについて検討した。

その結果、低学年においては、学級適応のうち友達関係と承認が、コンピテンスのうち友達コンピテンスが2学期に高まる傾向が認められた一方、生き方コンピテンスと支援ニーズ高群の問題解決コンピテンスは2学期の方が低下する結果となった。学級担任による支援の影響がコンピテンスを低下させた可能性があるのか、今後検討する必要がある。

高学年では低学年と異なり、学級適応感が時期によって変化するとは言えないが、友達関係と被侵害において1学期には支援ニーズによる差が認められていたものの2学期には支援ニーズの差が見られなくなっており、支援ニーズの高い児童に対する学級担任の積極的な支援が功を奏した可能性が示唆された。コンピテンスに関しては、友達コンピテンスと運動コンピテンスが2学期に高まっており、支援ニーズに関わらず学級担任の支援によって自信が持てるようになった可能性が示唆される。ただし高学年では、支援ニーズの高い児童の学習コンピテンス・友達コンピテンス・問題解決コンピテンスが時期にかかわらず低く、学習から社会性にわたる広範な領域で自信をもちにくくなっていることが示唆された。

このように、児童の支援ニーズに対して実際に学級担任が理解し対応することにより、児童の学級適応感およびコンピテンスは変化が生じる領域であることが示唆された点は意義が大きいであろう。また、大学と地域の小中学校との連携をより有効に活用する方略を検討する手がかりとしても意義があると考えられる。

本研究では学級担任による支援ニーズ認知にもとづいた検討を行ったが、児童の学級適応感に直接的に影響を与える要因を検討するためには、研修会後に学級担任が具体的にどのような取り組みを行ったのかを抽出する必要がある。学級担任が児童に対する支援ニーズの把握にもとづいて、どのような教育支援を行い、どのような成果を得ているかについては、西出・安立(2016a)で検討した。

本研究は1年間の経過について学級担任と児童の双方が評価したデータに基づいたアクションリサーチを行ったが、学級は原則年度ごとに入れ替わっていくものである。今後も追試研究によって、検討を重ねることが必要であると思われる。

付記 本研究へのご協力に同意してくださったA小学校のみなさまに感謝いたします。なお、本研究は、日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金第40回の補助を受け、日本心理臨床学会第34回秋季大会(神戸国際会議場)において、【表題：学級担任による支援ニーズ理解が児童の学級適応に及ぼす影響—学級経営支援研修会を活用したアクションリサーチ—】としてポスター発表した内容を加筆修正したものである。

注

- 1) 本研究は、椋山女学園大学人間関係学部研究倫理委員会発足前に行われた研究である。
- 2) 本研究では支援ニーズ認知得点のみを扱ったが、「学級経営支援研修会」では支援ニーズの具体的な特徴を伝えるために、学級担任による自由記述をもとに「児童のこころの健康のための支援マニュアル」(西出・安立, 2016b)を作成した。そこで記載した支援ニーズ別の詳細は以下の通りである。支援ニーズ高群に分類された児童は「学習上の課題」「社会性の課題」「行動上の課題」「対人関係上の課題」の複数の領域の得点が重複して高い傾向にあり、支援ニーズ低群は特定の領域の課題が若干認められる児童が多い傾向が認められた。個々の支援ニーズ

別にみると、「学習上の課題」がある児童には、境界性知能・アンダーアチーバー、学習意欲の課題・家庭学習の困難、学習障害・認知特性の偏り、社会性・想像力の困難、注意集中・衝動コントロールの困難が、「社会性の課題」がある児童には、状況理解の困難、他者の感情認知の困難、衝動・感情コントロールの困難、集団行動・ルール理解の困難が、「行動上の課題」がある児童には、集団行動・ルール理解の困難、多動・注意集中の困難、衝動コントロールの困難、感覚特性の偏り・清潔さへの配慮困難が、「対人関係上の課題」のある児童には、集団適応の課題、ネガティブ感情への対処困難、神経症的な症状、家庭生活の安定性に関する課題が認められた。また、「家庭環境上の課題」がある児童には、養育者の接し方・基本的養育面の課題、養育環境のサポート資源の課題、ネガティブ感情への対処困難が、「身体・健康上の課題」がある児童には、アレルギーの課題、心身症的な症状、生活リズムの課題、清潔さの課題が認められた。

引用文献

- 菊池章夫 (2007) : 社会的スキルを測る—KiSS-18ハンドブック—. 川島書店.
- 国立特殊教育総合研究所 (2008) : 地域の支援をすすめる教育相談の在り方に関する実際研究・そのⅡ—関係機関と協働して行う総合的な支援体制の構築—. www.nise.go.jp/cms/8,131,52,239.html
- 西出弓枝・安立奈歩 (2016a) : 児童の学級適応調査を活用した担任教諭による教育支援—事前事後調査にみる支援方略の選択と成果—. 人間関係学研究, 14, 91-104.
- 西出弓枝・安立奈歩 (2016b) : 児童のこころの健康のための支援マニュアル—調査の活用と支援のヒント集—. 未公刊.
- 西出弓枝・布本肇 (2006) : 特別支援教育に関わる教師の意識および児童の実態とニーズに対する支援について—特別支援教育に関わる意識調査から—. 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 26, 7-12.
- 西出弓枝 (2008) : 特別支援教育体制への移行における教師の意識—小学校と中学校の相違—. 椋山女学園大学研究論集 (社会科学篇), 39, 41-51.
- 文部科学省 (2004) : 特別支援教育を推進するための制度の在り方について (中間報告). 平成16年12月1日中央教育審議会 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05020701.htm
- 桜井茂男 (1983) : 認知されたコンピテンス測定尺度 (日本語版) の作成. 教育心理学研究, 31(3), 245-249.